『国語教育誌』の書誌と記載内容概要（六）

有働　裕

本稿は、『愛知教育大学大学院国語研究』十七号～二十一号に掲載したものに続けて、国語教育学会編『国語教育誌』の目次と書誌を示し、加えて掲載論文・記事の概要を記したものである。

『国語教育誌』刊行の経緯とその資料的価値、および凡例については『愛知教育大学大学院国語研究』十七号に記したので省略することにするが、本稿で扱う昭和十六年九月号を最後に本誌は休刊したものと思われる。従来の年度に比してページ数が減じていること、国家主義的傾向がいっそう濃厚となっているところに、国民学校実施後から日米開戦に至る時期の、国語教育研究者の置かれた困難かつ複雑な状況を読み取ることができる。

◇第四巻第一号（昭和十六年　一月号）

《目次》

巻頭言　芭蕉の言葉・・・・・・・・・・・・能勢朝次（二）
児童の生活と文学・・・・・・・・・・・波多野完治（三）
「引用」論・・・・・・・・・・・・・・・・・山口　正（五）
話し方教育の新秩序・・・・・・・・・・・飛田多喜雄（七）
話し方教育について・・・・・・・・・・・奥田勝利（一四）
新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（一八）

※波多野完治の「児童の生活と文学」は、本文では「児童の生活と文章」になっている。

《奥付　p19》

昭和十六年一月月五日印刷
昭和十六年一月十日発行　　　（第四巻第一号）
定価金拾銭（郵税五厘）
編集兼発行者　東京市世田谷区烏山町六九〇　藤村　作
印　刷　者　東京市神田区神保町一ノ四四　戸根木豊太郎

印　刷　所　　東京市神田区神保町一ノ四四
戸根木共栄堂印刷所
定価　普通号　一部金拾銭　郵税五厘　一年分　金壹円（送料共ただし前金直接御申しこみに限ります）
御注文規定
▽本誌の御注文は一切前金にお願ひいたします。
▽御送金はなるべく振替を御利用ください　振替東京六五八四二番
発行所　東京市世田谷烏山町六九〇　国語教育学会
振替口座東京六五八四二番
発売所　東京市神田区一ツ橋二ノ三　岩波書店
電話九段（33）〇一八七番

《広告》

波多野完治・滑川道夫・小川一郎執筆『児童文学論』岩波書店三月刊行予定（p13）

時枝誠記『国語学史』国語教育学会編『標準語と国語教育』岩波書店　刊行予定（裏表紙）。

《記載内容概要》

巻頭言の芭蕉の言葉（能勢朝次）は、『三冊子』の「黒冊子」に記された芭蕉の言葉「俗語を正す」にふれながら、「表現によって愛育せられる我々の心」のあり方の重要性を述べたもの。

児童の生活と文章（波多野完治）は、自身の長男（三年生）が書いた作文を例に挙げて、ありのままの体験を書くことから「想念文や説明文」を書く段階への「過渡期」の児童の生活綴方指導に対する反省を促す。

「引用」論（山口正）は、程子の文章や徒然草などを例にして「引用されるものの原典としての絶対性高貴性を忽せにしたり汚したりしてはならない」ことを強調し、現行教科書の注釈のあり方を批判する。

話し方教育の新秩序（飛田多喜雄）は、「物言ふ行為」は「口頭的記号体系」と「書写的記号体系」から成り立っており、また国語教育も音声言語と文字言語との「調和的充実」を図るべきであるが、従来の教育は音声言語の指導や家庭での言葉のしつけに無関心すぎた、という趣旨の文章。抽象的で文章量の割には内容に乏しい。その分、「国語は、単に意志を他に伝達するといふ便利な道具ではなく、三千年の歴史を持つ国民の精神的血液である」といった上田萬年の「国語のため」を下敷きにしたと思われる文章、「一切の文化の尖端であり、国民の姿を映す鏡である国語の中にこそ国民精神は宿り、これによつて国民は統一的に結合する」などの記述を含む前田博『教育科学』からの引用、国民学校令によって定められた「国語の精華を涵養し国民の使命を自覚せしめる」という国語科の目標に関する記述などで占められている。

話し方教育について（奥田勝利）は、「音声言語の地盤の上

に文字言語が発達した」以上、初等教育において音声言語を重視するのは当然のことであり、国民科国語の示す方向性は喜ばしいとしながらも、指導者が「醇正な国語」を持ち得ていないと批判する。さらに、一時的・流動的・直接的などの音声言語の諸特性にふれ、最後に道元が『正法眼蔵』で説いた「愛語」に言及し、「話し方指導に携るものは、先づ第一に、正しく、美しく、愛に満ちたる優れた言語を持ち、それを批判する確かな基準を自得することが肝要である」と説く。

新刊紹介は、**国語文化学会**編の『**国民学校国語教育の研究**』（**国語文化研究所**）と**時枝誠記**の『**国語学史**』（**岩波書店**）を紹介する。前者は雑誌『コトバ』の同人の論文集で、その題目と執筆者は以下の通り。国民学校国語教育の問題（石山脩平）、日常の国語といふこと（三宅武郎）、言語と思考・感動との関係（湯山清）、理会力の養成（名取尭）、発表力の養成（石井庄司）、読み方の諸問題（西原慶一）、綴り方の諸問題（大場俊助）、書き方の諸問題（古田拡）、話し方の諸問題（輿水實）、発表と抑揚の指導について（三宅武郎）、語法初歩の指導（今泉忠義）、標準語と醇正国語（熊澤龍）、国語の特質（菊澤季生）、国語の尊重・愛護・醇化（石黒修）、国民学校の基本方針第七項と国民科国語（波多野完治）、実際家への提言（輿水實）。後者については、著者によるはしがきの一節を引用している。

◇第四巻第二号（昭和十六年　二月号）

《表紙》

第四巻　第二号　二月号　国語教育学会

《目次》

巻頭言　国語の表記法について……………藤村　作（一）
話し言葉の特質とその教育……………石黒魯平（三）
近ごろの文章……………片岡良一（七）
読方指導の実地研究……………（一一）
学会消息……………（一九）

※表紙の目次には記載がないものの、10ページには長谷川如是閑の「言語の文学」（『図書』昭和十五年十一月号からの抄録）が掲載されている。

《執筆者紹介　p19》

藤村　作　東京帝国大学名誉教授・文学博士・本会々長
石黒魯平　東京高等師範学校教授
片岡良一　元法政大学教授・本学評議員

《奥付　p18》

昭和十六年二月五日印刷
昭和十六年二月十日発行　（第四巻第二号）

※以下、前号と同じ。

《広告》

池田亀鑑著『古典の批判的処置に関する研究』全三冊　岩波書店（裏表紙）

《記載内容概要》

巻頭言の国語の表記法について（藤村作）は、「国語各個の表記法の制定統一」を主張するもの。たとえば、「家（イエ／いへ）」「苗（ナエ／なへ）」などは漢字を用いることに決め、「ひそかに（私かに／密かに／窃に）」などは仮名書きにするなど、基本語彙の表記法を制定してしまえば、仮名遣いや送り仮名、漢字問題も解決に向けて大きく前進する、とする。

話し言葉の特質とその教育（石黒魯平）は話し言葉と書き言葉とを対立概念としてとらえるのではなく、「話し言葉の働き」と「書き言葉の働き」とを対比させてとらえるべきだとし、「話しといふ働き」は、未完成のままで常に改訂を繰り返す規準に依拠していると述べる。また、教育においては、朗読や講演などの特殊なものと言語生活における話し言葉とを明確に区別し、「話し」の「時間的線状性」や「壁面的立体性」を考慮すべきであると述べている。

近ごろの文章（片岡良一）は、「文章界」においても「新しい建設の方向」が目指されてはいるが、まだ統一には至っていない現状を嘆く。とりわけ、「飽く迄も知的に冷徹であるべき学術的表現などにも、兎もすれば強調的な感情の傾斜を孕んだポーズや硬度を持たせる」傾向を非難している。また、満州の若手作家古丁の発言などを紹介しつつ、「日本語の海外普及」が進む一方で、日本語の科学的究明の立ち遅れや規範の不統一が大きな問題になっているとする。

読方指導の実地研究は、昭和十五年十二月十四日（土）に谷中尋常小学校で行われた、同校の訓導**齊藤英**による一年生を対象としたの指導案・授業・研究討論の記録。研究会の参加者は以下の通り。**半田源之助**（東京市谷中小学校校長）、**齊藤英一**（同校訓導）、**西尾実**（東京女子大教授）、**芳賀杜牛**（滝野川第八小学校長）、**鈴木睿順**（駒込中学校教諭）、**杉野祐毅**（源氏前小学校訓導）、**江藤迫**（御徒町小学校訓導）、**藤田辰一**（高田第四小学校訓導）、**大久保正太郎**（国語教育編輯部）、**白石大二**（府立第三中学校教諭）、**佐藤ふみ**（神谷小学訓導）、**根岸玄一**（同）、**保田勳夫**（板橋第六小学校訓導）、**戸田駿**（入新井第一小学校訓導）。

「一指導案」では、『小学国語読本』巻二の「十二、コブトリ」を教材とし、指導の「要旨」は「滑稽味に富んだこの童話の面白さにひたらせる」ことであると述べている。また「教材観」として、教材化に当たって省略された原典『宇治拾遺物語』の後半部分も取り扱う意向であること、翁の踊りの面白さや機知を中心に読み取らせたいことなどが記されている。

「二、指導」については、全記録の初めの三分の一程度を引用することで紹介に代えたい。

児童入場・参観者入場

〔電鈴〕授業開始

一同起立・敬礼

〔黒板に掛図ががかかり、教科書六十二頁の挿絵のところが開けてある〕

先生　今日はね、これからコブトリの続きの勉強をしませう。

〔教師、コブトリと板書〕

先生　本をお出しなさい。読みませう。

〔児童、教科書を出す〕

先生　先生が一度読んであげますから、昨日のお話を思ひ出して下さい。昨日のお話の続きがどうなるか考へながら聞いてください。

〔先生、朗読〕

先生　さういふお話なのね。昨日勉強したことは、右の頬に大きな瘤があつて困つたお話でしたね。……今日はね、おぢいさんはぶる〳〵ふるへてどうなつたかを勉強しませう。……一枚開けて頂戴。……オヂイサンハ、「ヨロシイ。……」トイヒマシタ。そこまで今日勉強するの。

先生　読める子。

〔児童、手を上げる。一児童に読ませる〕

先生　もう一度読んでください。

〔一児童に読ませる〕

先生　よく読めましたね。さういふお話でせう。皆で少しづゝ読みながらお話ししていきませう。

〔先生が六十五頁三行目から六十六頁一行目まで朗読〕

先生　さあお話ししてください。

〔一児童が指名されて、梗概のやうなことを話す〕

〔他に二児童を指して同様のことをやらせる〕

先生　おぢいさんは恐ろしいことも忘れて踊りだしたが、みつかつたらどうなるだらう。

児童　〔指されて〕みつかつたらお魚の代りに食べられてしまふ。

先生　そんなことも忘れて飛び出したのは、どうしてだらう。

児童　〔指されて〕おぢいさんはたいそう踊が好きだつたから。

〔教師、大ソウヲドリガスキデシタ。と板書〕

先生　かうなのね。一番初めおぢいさんは木の中にはいつて眠つてしまつたの。〔その真似をする〕おぢいさんは驚いた。〔その真似をする〕そのうちにおぢいさんは飛び出してしまつたの。〔その真似をする〕〔教師、トビ出シマシタ。と板書〕

先生　皆だとどうするかな。

児童　〔二三の児童、異口同音に〕飛び出せない。

先生　では、飛び出したところまで読んで頂戴。

〔児童、斉読〕《以下略》

「三　相互研究」は、教科書に掲載されていない『宇治拾遺物語』に記されている後半部を扱うべきかどうか、朗読の指導をどのようにすべきか、読解内容を教師が「行動化」（動作化）することの是非が主たる話題となっている。最も多く発言しているのが西尾で、次いで大久保、江藤の順である。

◇第四巻第三号（昭和十六年　三月）

《表紙》

国語教育誌　第四巻　第三号　三月号　国語教育学会

《目次》

巻頭言　表音記号の制定…………藤村　作（二）
言葉の空白…………能勢朝次（三）
国語の基準…………今泉忠義（七）
「尻取り」について…………中里政一（一〇）
切抜帖…………ＸＹＺ（一五）
新刊紹介…………（一八）

《執筆者紹介　p19》

藤村　作　東京帝国大学名誉教授・本会会長・文学博士
能勢朝次　東京文理科大学教授・本会理事
今泉忠義　国学院大学教授・本会研究調査部委員
中里政一　東京市大森区馬込尋常高等小学校訓導

《学会消息　p19》

国語教育学会叢書第一巻『児童文化論』の刊行

《奥付　p19》

昭和十六年三月二十五日印刷
昭和十六年三月三十一日発行　（第四巻第三号）
※以下、前号と同じ。

《広告》

木村素衛『美のかたち』安倍能成『時代と文化』金子武蔵訳『ヘーゲル精神現象学（中）』岩波書店（裏表紙）

《記載内容概要》

巻頭言の**表音記号の制定（藤村作）**は、仮名遣いにかかわる「実用主義」と「伝統主義」の対立の解決策として、橋本進吉の唱える表音記号制定を推奨する文章。

言葉の空白（能勢朝次）は、蕉風俳諧は「全く国語の世界の

もの」であり、「外国美学の発想法」では理解不可能なものであるとする。また、蕉風連句の面白さは「句と句との間の空白を味はふ興味」であり、それは「言葉の持つ力の限界をも隈なく見極めた人」にして成し得ることであると述べる文章。

国語の基準（今泉忠義）は、「標準語」の根拠があいまいであることを指摘し、初等教育では方言は排除すべきでなく、むしろ国語教育を生活から遊離したものにしないよう、方言を基礎とすることを主張する。また、標準的な国語というものについて国語読本を「媒材」として考えさせることが重要だと述べている。

「尻取り」について（中里政一）は、尋常三年生の男女六十名を対象に、尻取りの実践を通して「文字の書き方と音との関連性―拗音・拗長音、撥音で終わる語尾を児童はどう見てゐるか」を調査した結果について具体的に示すもの。「ベンタウ」に対して、「ウ」を語尾ととらえる児童が比較的優等生に多く、「タウ」とするものが劣等生に多いことなどを例に、「優等生は文字に根拠を求めよう」とし、「劣等生は文字を想起しなかつた」ために音・音節を意識していると述べる。

切抜帖（XYZ）は、国語国字の統一整理の問題、とりわけ漢字と仮名遣いの問題に言及したもの。農林省の告示による青果類の表記統一、陸軍による兵器類の用語の簡易化、安藤正次・倉石武四郎の、「漢字は量的に整理するとともに、質的にも整理しなければならない」という主張を、いずれも肯定的な立場から紹介する。「支那事変」以後の「国民精神の統一作興、国民教育・国民生活の能率増進、東亜の共通語としての日本語の普及」の必要性の強調が基底にあるもので、中等学校における漢文教育批判にまで話が及んでいる。

新刊紹介は国際学友会編『日本語教科書　基礎編・巻一』を扱う。大人向けの教科書であるのに小学読本からの引用が多いこと、練習問題での例示の不足、分かち書きの導入、仮名遣いの不備などが厳しく指摘されている。

◇第四巻第四号（昭和十六年　四月）

《表紙》

国語教育誌　第四巻　第四号　四月号　国語教育学会

《目次》

巻頭言　国民科国語・・・・・・・・・・・・・久松潜一（二）
日本の言語と文学・・・・・・・・・・・・・岡本千万太郎（三）
児童文学史研究ノート㈥・・・・・・・・・・・菅　忠道（八）
芭蕉の教育者としての一面・・・・・・・・・稲田伊之助（一二）
中学一年の国語教室から・・・・・・・・・・阿部喜三男（一五）

《執筆者紹介　p19》
久松潜一　東京帝国大教授・文学博士・本会理事
岡本千万太郎　国際学友会教授
菅　忠道　雑誌「教育」編集者
稲田伊之助　愛媛県立西條中学校教諭
阿部喜三男　東京府立第三中学校教諭

《奥付　p19》
昭和十六年四月二十五日印刷
昭和十六年四月三十日発行　（第四巻第四号）
※以下、前号と同じ。

《広告》
国語教育学会編『児童文化論』桑原武夫『アラン芸術論集』
岩波書店（裏表紙）

《記載内容概要》
巻頭言の国民科国語（久松潜一）は、初等教育の国語が国民科国語に改編されて「皇国民の錬成に向つて一意進むべき」ことになったことを称賛し、「この精神は国民学校に於けるのみならず中等学校、高等学校及び大学に於いても一貫せらるべき」と主張する。

日本の言語と文学（岡本千万太郎）は、日本人は漢文を訓読して、すなわち「日本語」として読んで来たのであるから、漢字仮名交じりの表現で学べばよく、原文の表記にこだわるのは「支那崇拝または支那趣味のあらわれ」であって「日本精神ではない」と主張。従来の初等教育での漢学重視の風潮から果ては女学校の書道で漢詩を扱うことに至るまで否定する。この時期の漢文学の置かれている状況を端的に示している文章といえる。

児童文学史研究ノート㈥（菅忠道）は、副題が「児童文学の転換期」。明治末年から大正五年頃までを「やがて来るべき児童文学興隆期の先駆的時代とも、準備時代ともみられる時期」として概観する。営利主義的な雑誌や単行本による低調卑俗、小川未明や蘆谷重常ら新人作家・研究者の登場、「愛子叢書」（大正二年・実業之日本社）や「世界少女文学」（大正三年、博文館）等の叢書の刊行、柳田国男や高木敏雄ら民俗学者による伝説研究などに言及している。

芭蕉の教育者としての一面（稲田伊之助）は、『去来抄』の「岩鼻やここにもひとり月の客」の一節を例に、指導者が思い切って自己の解釈を主張するのも有効な教育方法であると主張するもの。「児童本位の教育、自由主義的個人主義の教育は否定された」という認識がその前提としてある。

中学一年の国語教室から（阿部喜三男）は、自身が行った第一学年の学年末考査の生徒の解答例を具体的に、仮名遣い・口語文法・漢字表記などの認識に混乱が見られることを示す。

なお、この号の学会消息は全体でわずか十数行に過ぎないが、次のような文章が含まれており、雑誌刊行の困難さを窺わせている。

昭和十六年度の会費は、すでにかなり拂ひこみいたゞいている。雑誌発行に要する費用なども、本文十六頁といふ制限を厳重に守りながらも、以前にくらべると二倍以上にのぼつてをり、経営の困難を感じてゐる。会員各位の尚一層の御協力を期待してゐる。

◇第五巻第四号（昭和十六年　五月）

《表紙》

国語教育誌　第四巻　第五号　五月号　国語教育学会

《目次》

巻頭言　日本語教授改善統一の一方法・・・・・藤村　作（二）
現代詩の語法と表現・・・・・・・・・・・・・・・鳥山榛名（三）
東京語の形成・・・・・・・・・・・・・・・・・・中村通夫（九）
研究会記録について・・・・・・・・・・・・・・宮下忠道（一三）
言葉遣いとしつけ・・・・・・・・・・・・・・・真下三郎（一五）
学会消息・夏期講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（一八）

《執筆者紹介　p18》

藤村　作　東京帝国大学名誉教授・北京師範学院名誉教授・文学博士・本会々長
鳥山榛名　東京府立第三中学校教諭
中村道夫　文部省図書監修官補
宮下忠道　長野師範附属小学校訓導
真下三郎　文部省図書監修官補

《国語教育学会消息》

理事会／研究調査部会

《奥付　p19》

昭和十六年五月二十五日印刷
昭和十六年五月三十十日発行　（第四巻第五号）
※以下、前号と同じ。

《広告》

岩波文庫　長與善郎『竹澤先生といふ人』　豊島與志雄・佐藤正彰・渡邊一夫訳『千一夜物語（二）』　ベネット作、小山東一訳『老妻物語（上）』　アダム・スミス著、大内兵衛訳『国富論（二）（第二・三編）』　バジョット著、宇野弘蔵訳『ロンバード街』
夏目漱石『二百十日・野分』　マイエル作、浅井訳『フツテン最期の日々』　モーパッサン作、水野訳『酒樽　他六篇』　ド

ストエーフスキー作、米川訳『未成年（下）』モンテスキュー著、大岩誠訳『羅馬人盛衰原因論』マークトウエーン作　中村訳『ハックルベリイフィンの冒険』藤田徳太郎校訂『声曲類纂』河野與一訳『アミエルの日記』（裏表紙見返し）佐々木信綱・新村出共編『萬葉図録　文献篇　地理篇』新村出『随筆集　橿』久松潜一編『国語国文学年鑑』第一輯・第二輯佐々木信綱・新村出共編『萬葉図録　動植物工芸芸術篇』藤井乙男・新村出・志田義秀・頴原退蔵『芭蕉図録』佐々木信綱『万葉随筆（仮題）』土井忠生『吉利支丹語学の研究』靖文社刊行・柳原書店発売（裏表紙）

《記載内容概要》

巻頭言の日本語教授改善統一の一方法（藤村作）は、外国人に対する日本語教授に必要な「調査制定事項」として、音声言語では語彙調査・表音記号の制定・表音記号による語彙の作成・基本文法調査・基本文形調査、文字言語教授では語彙調査・語彙表記法の制定・基本文法調査・基本文形調査を提示する。

現代詩の語法と表現（鳥山榛名）は、「現代詩に現れてゐる語法や表現に関する種々の問題を瞥見しよう」とするもの。「Ⅰ語彙の問題」として外国語の使用と古語の使用、「Ⅱ句法の問題」として倒置・「シナリオ形式」・「名詞止め」、「Ⅲ表現態度」として「具象的に、精細にと表現をすすめる傾向」に言及。なお、その後の埋め草のようなスペースに**工藤好実の詩的技巧**（「詩学」からの抄出）が掲載されている。

東京語の形成（中村通夫）は、「東京語が江戸言葉の殻を離れて今日の形態をとるに至つた経過」について、第一に地方語の混入、第二に外来語と外来語の漢語訳、第三に社会制度の変革にともなう待遇表現の変化の三つの観点から言及する。さらに、それ以外の「本質的な契機」として、東京語と「文字及び文字言語」との緊密な結びつきや言文一致運動に影響された表記法について述べている。

研究会記録について（宮下忠道）は、二月号に掲載された「コブトリ」の実践をめぐる論議に苦言を呈するもの。討論が本質から外れた典拠に関する問題に偏っており、実践者も先入観によって児童の読みを妨げていると批判する。

言葉遣いとしつけ（真下三郎）は、家庭における言葉の「しつけ」の重要性を、貝原益軒の『和俗童子訓』を引用しながら述べ、「言葉遣いの指導は、かやうに道徳・諸礼と結び付けられた」ものであったことを強調する。

奥付のページには、執筆者や学会消息とともに、以下のような第三回の夏季講座についての告知が載っている。

本会主催第三回夏期講座は、昨年のやうに八月一日から五日まで、東京帝国大学文学部教室においてひらくことに決定した。題目及び講師については目下交渉中であり、詳細は六月号の本誌に発表の予定である。昨年同様各位のご参加とご支援をお願いしたい。

◇第四巻第六号（昭和十六年　六月）

《表紙》

国語教育誌　第四巻　第六号　六月号　国語教育学会

《目次》

巻頭言　使命達成のために・・・・・・・・・・・西尾　実（二）
中等学校の国語教育・・・・・・・・・・・石井庄司（三）
国民教育の精神・・・・・・・・・・・・・藤田徳太郎（一一）
俳諧道に於ける師匠と門人・・・・・・・・・山本善太郎（一五）
国語教育学会第三回夏期講座・・・・・・・・・・・・・・（一八）

《執筆者紹介》　なし。

《国語教育学会消息》　なし。

《奥付》

昭和十六年六月二十五日印刷

昭和十六年六月三十日発行　（第四巻第六号）

※以下、前号と同じ。

※別に刷ったものをｐ19の夏期講座の時程表の上から貼付している。

《広告》

六月の岩波文庫新刊　松田武夫校訂『李花集』、真淵著・松田好夫校訂『語意・書意』、高浜虚子撰『子規句集』、厨川文夫訳『ベーオウルフ』、ポズウェル著・神吉訳『サミュエル・ジョンスン伝（上）』、クライスト作・吉田訳『ミヒヤエル・コールハースの運命』、エッケルマン著・亀尾訳『ゲェテとの対話（中）』、ハルベ作・番匠谷英一訳『青春　他二篇』、リルケ著・高安国世訳『ロダン』、ロマン・ロラン作・宮本訳『魅せられたる魂（三）』、グンドルフ著・竹内訳『シェイクスビアと独逸精神（下）』、フラートン著・福田訳『通貨論』（裏表紙）

《記載内容概要》

巻頭言の**使命達成のために（西尾実）**は、今後の国語教育学会の発展のためには全国にいくつかの支部を設けるべきだと提案する。合わせて、会の組織及び活動についての意見を会員に乞うもの。

中等学校の国語教育（石井庄司）は、各種の中等学校、とりわけ師範学校において、「国体明徴といふやうな点に重きを」置いた改革が必要であり、「錬成」という考えが不十分であると批判。中等学校での国語の教育も、初等教育が国民学校となったことに合わせて、「我々日本人は国語によつて思考し、行為し来つたのであり我々の思考や感動は、祖先伝来の国語と離れることの出来ないものであるといふ国語観」をもっと意識する

べきだと述べる。その具体的方策として、話し言葉による発表能力の育成、作文教育における「写生主義」の排除と実用性の重視、賀茂真淵にならった反復熟読を重視した読解指導などを提示している。

国民教育の精神（藤田徳太郎）は、自身が小学校で受けた、歴代天皇の名前を暗記するような教育を賛美し、その後の教育界に「恐るべき外国の自由教育、子供自身を尊べといふ美名のもとに、古来の厳格な訓練を無視した新しい教育」が流行したことは誤りであったと断定する。また、生活綴り方教育において、泥酔した父親の醜態や子供をいじめる母親、女性と密会する巡査の醜行などを子供に綴らせる実例などがあったことは、特定の教師の「思想」によって「児童の純真な精神」を蝕むものであったと批難する。それに比して国民学校の方向は「国民にとつて幸福」なことであり、「現在の知識階級の多くのものが持つてゐる思想や精神」を排除して、「草莽の民」として国民が一心にまとまらなくてはならないと主張する。

俳諧道に於ける師匠と門人（山本善太郎）は、芭蕉とその門人との師弟関係を教育的な観点からとらえるもの。「芭蕉は形式的・概念的なものを以て門人に押しつける様な師匠ではなかつた」にもかかわらず「俳諧道」を教え得たのは、両者の間に「親和性」があったからだと「三冊子」や「去来抄」を引用しつつ述べる。また、連句を「日本文学史上にあつて全く未曾有の全体主義の世界」として評価いる。

国語教育学会第三回夏期講座が、東京帝国大学（文学部第三十七号教室）において、八月三日から七日まで開催との案内が掲載されている。講座・研究発表・懇談会の三部から成り、講座の題目と講師は以下の通り（肩書きの表記は原文のまま）。「日本語教授と国語問題」東京帝大名誉教授文学博士藤村作、「題未定」東京帝大文学博士橋本進吉、「標準語の諸問題」学習院教授東京帝大講師東條操、「本居宣長と日本の学問」東京帝大教授文学博士久松潜一、「能楽の文化史的意義」東京文理科大助教授能勢朝次、「表現の問題」東京文理大教授文学博士務台理作、「題未定」東京女子大学教授西尾実。

◇第四巻第七号（昭和十六年　八月）

《表紙》

国語教育誌　第四巻　第八号　八月号　国語教育学会

（広島大図書館本、鶴見大図書館本、昭和女子大図書館本等は、「第八号」が「第七号」に手書きで修正されている。）

《目次》

巻頭言　国語と漢文・・・・・・・・・・・・・・・・・・久松潜一（二）

朝鮮における国語教育上の諸問題・・・・・・・・・・・森田梧郎（三）

東京アクセントの再検討（一）・・・・・・・・・・・・金田一春彦（七）

国語教育学会川口支部結成・・・・・・・・・・・・・・・(一二)
終助詞「が」と「を」との誤用・・・・・・白石大二(一三)
学会消息・其の他・・・・・・・・・・・・・・・・・・(一八)

《執筆者紹介》
p18の「編集後記」の中に次のように記されている。
本誌に御執筆くださつた森田悟郎先生は朝鮮総督府学務編輯官、金田一春彦氏は東京府立第十中学校教諭、白石大二氏は東京府立第三中学校教諭。

《国語教育学会消息》
国語国文学関係者懇談会/川口支部の結成/理事会/夏期講座の中止/藤村会長の帰朝
なお、夏期講座中止の理由については、「時局の重大にかんがみ」とある。
また、十七ページには、「本誌七月号は、都合により臨時休刊致しました」という報告、日本学術振興委員会昭和十六年度国語国文学会(六月十九から二十一日)の報告、雑誌『日本語』の発刊の告知が載る。

《奥付 p19》
昭和十六年八月五日印刷
昭和十六年八月十日発行 (第四巻第八号)

※以下、前号と同じ。

《広告》
佐々木信綱・新村出編『万葉図録 文献篇・地理篇』 新村出『橿』 久松潜一編『国語国文学年鑑』第一輯・第二輯 新村出編『万葉図録 動植物工芸芸術篇』 藤井乙男・新村出・志田義秀・潁原退蔵『芭蕉図録』 土井忠生『吉利支丹語学の研究』 靖文社刊行・柳原書店発売(裏表紙見返し)
山本有三『新編 路傍の石』 清水文雄校訂『和泉式部日記』 ブラッドリ著・橘忠衛訳『詩のための詩』 ブレンターノ作・伊東勉訳『ゴッケル物語』 フローベール作・生島遼一訳『感情教育 中』 赤松晋明校訂『鐵眼禅師仮名法語』 ディルケム著・庫古野清人訳『宗教生活の原初形態 上』 岩波書店 (裏表紙)

《記載内容概要》
国語と漢文(久松潜一) は、「支那語を外国語として」学ぶ機会が増えるとともに「従来の漢文も返点式をやめて支那語として扱うべき」という意見が提示されていることについて、「在来の漢文はむしろ国語国文学の領域として」扱うのが適当だと述べるもの。
朝鮮における国語教育上の諸問題(森田梧郎) は、朝鮮における国語教育では、低学年においては朝鮮総督府制定の「表音

かなづかひ」を学び、高学年（第四学年以上）になるとそれを歴史的仮名遣いに置き換えているという実情について述べ、

「この困難を克服し、生ける国語の教育をなし得る道は、国語の発音符号の採用ではあるまいか」と主張する。さらに、朝鮮の初等学校の教師の過半数が朝鮮人であって「教員の素質の低下」が懸念されること、既に三十年の歴史があるにもかかわらず「国語」の普及率が十四パーセントに過ぎないことを問題にしている。

東京語アクセントの再検討（一）―諸方言との比較から観た東京語アクセント―（金田一春彦）は、「全国方言のアクセントとの比較により、東京アクセントの諸問題に就て、考察を試みた」論稿の第一回。山の手と下町とではアクセントが異なること、「東京新市域」においても「旧市域」と同様な地域と異なる地域があること、足立区・江戸川区の一部に「近畿アクセント」に通じるものがあること等を、具体例をあげて示している。

国語教育学会川口支部結成は、昭和十六年七月五日に川口第六国民学校において行われた結成式とその後で行われた研究授業についての**山本善太郎**による報告。久松潜一や西尾実らの理事、西原慶一、石井庄司らの学会の中心メンバーも出席する大規模な会であったことがうかがえる。川口市側からは、中学校長梅根悟をはじめとして中学・工業・女学校・国民学校の関係者百二十余人が出席した。第六国民学校の友道訓導の研究授業は、合評批評会において厳しい批判を浴びたことが記されている。

格助詞「が」と「を」との誤用（白石大二）は、「私は兵隊の話を出来る柄ではない。（が）」「年がとりすぎている。（を）」など、談話や口語文にみられる誤用を示しつつ、「が」や「を」の「感情的意味の添加の真相」や「構文上に持つ法則」の究明の必要性を論じるもの。

◇第四巻第八号（昭和十六年　九月）

《表紙》

国語教育誌　第四巻　第八号　九月号　国語教育学会

《目次》

巻頭言　国民教育は個人生活の低級に反省せよ
・・・・・藤村　作（二）
国文学における一二の問題・・・・・・・・・・久松潜一（三）
東京語アクセントの再検討(二)・・・・・・・金田一春彦（七）
左千夫の歌の錬成・・・・・・・・・・・・安井憲三（一三）
学会消息・其の他・・・・・・・・・・・・・・・・（一八）

《執筆者紹介　なし》

《学界消息・其の他》

八月十五日に行われた評議委員会の報告。藤村会長から「理事・評議員・監事の任期が、本年の七月で終わるが、時局の関係で総会をひらくことは遠慮いたし、したがつて役員の任期も向かふ一ヶ年任期(ママ)したい」旨が提案され承認されている。それに従って全ての理事・評議員・監事の氏名が掲載されている。他に、事業報告や「北支における教育問題」の話しい合いが持たれた。

《奥付　p19》

昭和十六年九月五日印刷
昭和十六年九月十日発行　（第四巻第八号）
※以下、前号と同じ。

《広告》

白鳥倉吉『西域史研究　上』　高木市之助『吉野の鮎―記紀万葉雑攷―』　岩波書店（裏表紙）

《記載内容概要》

巻頭言の国民教育は個人生活の低級に反省せよ（藤村作）は、明治以来「白人種」が日本にやって来て、学資の支給や救貧のための協会設立など、「その自ら感じてゐた優越性を常によき意味に発露していた」のに比べ、「然るに大陸等に於ける日本人の個人生活を見よ、こゝには悲しむべき外人侮辱、搾取的行為がないといへるであらうか」と、日本人個々人の態度について反省を促す文章。あくまで「日本国は断じて侵略国でない」という文脈においての主張ではあるが、大陸を視察した後の藤村の心境の変化が表れているといってよい。

国文学に於ける一二の問題（久松潜一）は、今後の国文学研究のあり方として、「時局に応じて直接に役立つ」態度と、「日本的立場」での体系化をめざす態度とを一致させるべきだとする。また、「日本文学が世界性を有するといふことは、日本文学の特質を堅持することにより世界性を得る」ことになるとして、国文学研究は学問の普遍性と合致すると主張。さらには、本居宣長の「うひやまふみ」の「物学とは、皇朝の学問をいふ」以下の一節を引用して「国文学と国語教育とを一体とす」べきであると主張する。抽象度が高く、トートロジーに陥っているともいえる文章。なおこれは、編集後記には、昭和十四年六月に文理科大学で催された国語教育学会の研究発表大会での講演の大要であると記されている。

東京語アクセントの再検討（二）―諸方言との比較から観た東京語アクセント―（金田一春彦）は、前号掲載のものの続きとして「現在わが国のアクセントは、地方地方により非常に相違しているが、その種類にはどんなものがあり、東京アクセントは其中にあつてどう言ふ地位を占めるべきもので」あるのかを論じたもの。「多型方言」の一種としての東京語のアクセン

トの特徴を調査報告の形で示している。

左千夫の歌―特にその語法に就いて―（安井憲三）は、伊藤左千夫の「九十九里の磯のたらひは天地の四方の寄合（よもよりあひ）に雲たむろせり」の解釈を論じたもの。万葉集での「天地」「四方」などの用例や、左千夫特有の助詞「は」の用法などに言及。なお、編集後記によれば著者は東京府立第六高女の教諭。

新刊紹介は、**『国語文化講座第一巻　国語問題篇』（朝日新聞社）、久松潜一編『国語国文学年鑑（昭和十四年度分）』（靖文社）、上野勇『方言地理学』（広川書店）**をごく簡略に紹介する。『国語文化講座第一巻　国語問題篇』の執筆者と題目は以下の通り。安藤正次「国語の政策」、岸田国士「国語純化の道」、石黒修「国語の展望」、倉野憲司「国語の表記法」、吉田澄夫「漢字の問題」、松坂忠則「カナモジ問題」、菊澤季生「ローマ字運動」、荘司武夫「国語と国防国家」、林髞「科学と国語問題」、小島政二郎「国語問題について」、柳田國男「標準語と方言」、佐久間鼎「新しい語法」、土居光知「基礎日本語の試み」、茅野蕭々「外国語の問題」、石黒修「参考書目」、編集部「国語問題年表」。

付記　本稿は文部科学省科学研究費による『国語教育誌』（国語教育学会機関誌）を対象とした昭和戦前期の国語教育の動向に関する研究」（基盤研究C・平成22～25年度）の一部である。

（了）

（うどう・ゆたか　本学教授）